魔法少女リリカルなのはGODｏｒLVF

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＧＯＤｏｒＬＶＦ

【Ｎコード】
Ｎ４０６５Ｙ

【作者名】
六甲水

【あらすじ】
マテリアル事件から三ヶ月の月日が立ち、季節も冬から春へと変わった頃、とある次元の世界で時の守護者である姉妹の一人がとある事件を起こす。
その影響で別世界の未来では二人の少女が次元の穴に巻き込まれ、スターは二人の行方を追い、さらにその先の未来ではディバイダー所持者の少年とリアクトプラグの少女もまた次元の穴に飲み込まれ、その兄である男とパートナーの少女が助けに向かう。そしてさらなる別世界では機動六課の別部隊が次元の穴の調査を行うために次元

の穴へと入り込む。

とあるなのはＶｉＶｉＤ＆ＦｏｒｃｅとＬＯＳＴＭＡＧＩＣの住人たちが同じ世界でめぐり合い、そこで何かが起きる

ＬＶＦ０１　次元の向こうから……（前書き）

というわけで、ゲームの話を元にした物語の始まりです。最初はそれぞれの主人公たちが次元の穴へ入る話です。

ＬＶＦ０１　次元の向こうから……

マテリアル事件から三ヶ月後、見事解決したなのはたち。今は穏やかな日々を歩んでいるのだが……

とある次元世界

「じゃあね、アミタ。例の件は私がしっかり成就してくるから、」

ピンクでロングの少女がそう言いながら、次元の壁を破り、姿を消すのであった。残された赤髪の少女は……

「キリエ！くっ、早くキリエを止めないと……次元が……」

アミタと呼ばれる少女は妹であるキリエを追って、次元の果てへと向かうのであった。

一方　別次元の別の時間軸の世界

「それじゃあ、行くますよ。アインハルトさん。」

「はい」

ヴィヴィオとアインハルトは今日も一緒に練習試合を行なっていた。そんな二人をベンチに座りながら見つめるスター。彼女は闇の欠片の一人であり、人間になりたいという願いを叶えたものである。

「二人とも、無茶はしないでください。」

そんな穏やかな日々を過ごしていた三人だが、そんな三人の前に突然巨大な穴が開いた。

「こ、これは……」

スターは咄嗟に空へと飛んで穴に飲み込まれずに済むのだが、ヴィヴィオとアインハルトの二人は一瞬の出来事だったせいか、その穴に飲み込まれてしまった。

「この穴は……次元の穴？早く二人を追わないと……おかしな次元世界に飛ばされてしまう。」

スターはバリアジャケットを身に纏い、次元の穴へと入っていくのであった。

そしてこの時間でも……

「おいおい、俺は確か、トーマとリリィと一緒に訓練中だったはずなんだけどな……」

ソーガはそう言いながら目の前に広がる次元の穴を見つめた。トーマとリリィの二人は突然現れたその空間に飲み込まれてしまったのだ。

「くそ、さっさと助けに行くか。ギル、セットアップ」

ソーガはバリアジャケットを装着すると、隣にいた少女に話しかけた。

「イリス、何があるか分からないから、ユニゾンするぞ」

「うん、ユニゾン・イン」

イリスとユニゾンし、次元の穴へと入るソーガたち

そして、この次元でも……

「あらあら、面白そうな空間が出来ているじゃない。」

「巨大な魔力の反応を追ってきてみれば……」

「……次元の穴が出来ている。」

フーレ、エクス、サクヤの三人は巨大な魔力を感じて、グラナガン

の立入禁止地域に来ていた。そんな三人の前に次元の穴が開いていたのだった。

「さて、機動六課の一員として、これの原因でも調べてみましょう」

「ボスがそういうのであれば……」

「はぁ、結局こうなるのか。しょうがない。行くか」

三人は次元の穴へと入り込むのであった。

原因である少女たち、そして知らずの内に巻き込まれた各次元に住む者たち。これは決して混ざわることがない世界の住人たちの物語である。

ＬＶＦ０１　次元の向こうから……（後書き）

次回はソーガ編から始まります。

ソーガ０１　幼き頃のなのはとの出会い（前書き）

今回はソーガが幼い頃のなのはとの出会いです。

ソーガ01　幼き頃のなのはとの出会い

次元の穴を通って、トーマとリリィの二人を救出へと向かったソーガとイリスの二人。二人は次元の穴の先へとたどり着くと、そこは……

「何か普通の街に出たな。」

「そうだね。てっきりおかしな異次元空間とかに出るかと思ったけど……」

二人の目の前には広がる景色は、ミッドチルダと違って巨大な都市とかではなく、普通の街であった。

「それにしても、何だかここ見覚えがあるんだよな。」

「そうなの？」

「あぁ、何かなのはさん辺りに写真を見せてもらったような……」

ソーガがそんなことを思っていると、遠く離れた場所から誰かが結界を開く感じがした。

「ここにも魔導師がいるのか？」

「そうみたい。ここからそう遠く離れてないから行ってみようよ。」

「あぁ、」

二人は結界が展開された場所、街からそう離れていない丘へと向かうのであった。

丘へとたどり着いた二人は目の前に広がる結界を見つめた。

「さて、とりあえず、この結界を開いた人にでも話を聞いてみるか」

「話って？」

「ここはどこなのかだよ。俺たちはおかしな場所に来てるかもしれないだから……」

「そうだよね。それにまだ日が登り始めたばっかりなのに……結界なんて開いて……なにしてるんだろうね？」

「とりあえず、行ってみようぜ！」

ソーガとイリスの二人は謎の結界へと入り込むのであった。

結界の中に入った二人は、しばらく辺りを歩いていると、結界の中心らしき場所へとたどり着いた。そして、そこには幼い少女と小さな小動物が空き缶を使って魔力弾の練習を行なっていた。その少女が使う魔力弾の色に……ソーガとイリスは見覚えがあった。

「あれは……」

「もしかして……」

「ちょっと話しかけてみようか」

ソーガは少女のことが気になり、話しかけるために少女の元へと向かった。イリスもソーガの後ろをついていく。

「あの、君たち、ちょっといい？」

「はい？」

「君たちはどうして、結界に入り込んでいるんだ？」

話しかけられ、振り向いた少女と結界の中を自由に歩いているソーガたちに驚く小動物。だが、ソーガたちはその少女に少し見覚えがあった。それは……

「なのはさん？」

「えっ、確かに、わたし、なのはですけど……」

「イリス、これはどういうことだ？何でなのはさんが小さくなって

るんだ？」

「それ以前に、このなのはさんの魔力の感じ、私達が知ってるなのはさんと違う感じがするよ。」

「それってつまり、俺たちは……」

「うん、別世界のなのはさんたちの世界に来てたりして……」

ソーガとイリスの二人が現状について話している中、なのはは二人が何の話をしているか訳がわからなかった。

「ねぇ、ユーノ君。この二人、何の話してるの？」

「僕にも分からない。けれど、別世界がどうとか……」

「それじゃあ、次元漂流者かな？それだったらリンディさんに連絡を……」

「そうだね。僕が連絡して置くから、なのはは彼らに話を聞いておいてくれないか？」

「うん、分かった。」

なのはがソーガ達の元へ近づき、保護することを伝えると……

「保護？まぁ、俺らは別に次元漂流者じゃないんだけど……」

「でも、少し情報が必要かもしれませんよ。今私達がいるこの時間はどれくらいの時のことなのか？」

「そういえばそうだよな。ジュエルシード事件の時か闇の書事件の時か分からないし……」

「ジュエルシード、闇の書。どうしてあなた達が知ってるんですか？」

なのはがソーガたちの会話を聞いて、知っている単語が出てきたため、二人のことを警戒しだした。するとソーガは……

「う～ん、信じられないと思うけど、俺とイリスは別世界の遥か未来から来たんだ。」

「別世界？はるか未来？」

「とりあえず、詳しい話をしたんで、リンディさんに会わせてください」

ソーガとイリスはそれとなくリンディの名前を出すと、なのはとユーノは警戒しながら、二人をハラオン家に案内するのであった。

なのはと出会うソーガたちを、上空で見つめていた男が一人いた。

「ヤツの魔力。あれは……ロストマジックか。ボスのために貰い受けようか。」

ソーガ01　幼き頃のなのはとの出会い（後書き）

次回はＶｉＶｉＤ編です。

ヴィヴィオ01　二人の王とスターｖｓシュテル・ザ・デストラクター（前書き

今回はヴィヴィオとアインハルトの二人がフェイトと出会います。
そしてスターｖｓシュテル・ザ・デストラクターの戦いが始まります。

ヴィヴィオ01　二人の王とスターｖｓシュテル・ザ・デストラクター

ソーガたちがなのはと一緒にハラオン家へ向かっている頃、ハラオン家のマンションの屋上では……突然大きな音が鳴り響き、音の原因の場所には……二人の王がいた。

「いたた～、ここどこだろう？アインハルトさん大丈夫？」

「えぇ、いきなり空へ落とされて、多少の怪我を覚悟していましたが、どうやら無傷です。」

アインハルトが自分の体を見て言うと、ヴィヴィオはどうして自分たちがこんなところにいるか考えた。

「私たち、一緒に大会の練習してたんだよね。」

「えぇ、スターさんがそれを見ながら読書していましたが、確か、いきなり巨大な穴が開いて……」

「うん、それで私たちその穴にはいちゃったんだよね。それで気がついたらこのマンションの屋上の真上に出てきて……」

「とりあえず、ここがどこなのか知りましょう。そうしなければ動け……」

アインハルトが何かを言いかけた瞬間、突然構えて屋上の扉を睨んだ。

「ど、どうしたの？アインハルトさん？」

「誰かが来ます。ちょっと魔力も感じます。」

「そうなの!?だったら……ってあれ?そういえばこの景色何だか見覚えが……」

ヴィヴィオがそんなことを呟いていると、屋上の扉が開きアインハルトは身構えた。扉を開けて入ってきたのは……ヴィヴィオとそう変わらない歳の金髪の少女と紅い色の犬だった。

「さっきの大きな音、ここに何か落ちたみたいだけど……」

「フェイト。何か女の子が二人いるよ。」

金髪の少女と犬が何かを話していると、アインハルトはさらに身構えた。

(あの犬。しゃべっている。もしかすると使い魔?なら、隣の少女がその主……何だかヴィヴィオさんのお母様のフェイトさんに似てる気が……)

ふっとアインハルトがヴィヴィオを見ると、ヴィヴィオは困惑していた。

「あれ?何でフェイトママが小さく?あれ?」

(やはり、ヴィヴィオさんのお母様。でも、)

アインハルトが色々と考えだしたが、答えがまとまらず、少女に話しかけた。

「すみません。私たちは突然ここに落とされたのですが、あなたは魔導師の方ですか？」

「はい、時空管理局嘱託魔導師のフェイト・T・ハラオンです。こっちは使い魔のアルフです。」

「よろしくな」

（どうやら、本人みたいですが……ですがこれは一体……）

アインハルトがまた考えだすと、ヴィヴィオがあることを言い出した。

「あのもしかしてここ、海鳴市ですか？」

「はい、そうだけど……えっと、とりあえず詳しい話聞きたいからまずは名前を……」

フェイトに名前を聞かれて、ヴィヴィオは少し焦った。高町と名乗っていいのか……もしかして今自分たちがいる世界は過去の世界で、自分の名前を名乗ったら未来に何か影響があるかもしれないと……

…すると、アインハルトが気をきかせた。

「私はアインハルト・ストラトス。こっちが妹のヴィヴィオ・ストラトスです。」

「あ、はい。姉妹でこうして、」

アインハルトはヴィヴィオと自分が姉妹ということにすればなんと

かなると思った。

「うん、よろしくね。ヴィヴィオ。アインハルト。とりあえず私の家で詳しい話聞きたいから……あれ？なのはから連絡だ」

フェイトの口からなのはの名前を聞いて、この世界がどういう世界か確信したアインハルトとヴィヴィオ

「どうやら、私たちは過去に来ているみたいですね」

「うん、でも、何だかおかしいんだよね。フェイトママの名前はフェイト・テスタロッサ。ハラオンはクロノさんの名前なんだけど……」

「これはまだ確証がないのですが、私たちは別世界のなのはさんたちがいる世界にいるのでは、」

「えっと、それって、なんて言うんだっけ？」

ヴィヴィオが何かを思い出そうと考えだしていると、アインハルトが答えた。

「並行世界。同じ世界だけど、少し違うということですね。」

「うん、じゃあ、ここは……」

「えぇ、平行世界に私たちは迷い込んだのでしょう」

海鳴市の砂浜でスターは一人立っていた。

「次元の穴に迷い込んだ先が、海鳴市ですか。ですが、ちょっと違うみたいですね。そうですよね。『私』」

スターが空を見つめると、そこにはスターそっくりの少女がいた。

「えぇ、あなたがいた世界とは違う世界です。とりあえず、私は今はシュテル・ザ・デストラクターと呼ばれています。貴方は？」

「スターで結構です。」

「そうですか、ここで出会ったのも運命です。一戦お相手願います。」

「えぇ、こうしてお互い出会ってしまった以上、こうして戦うしかないみたいですね。」

「はい、世界には同じ自分は……」

「「一人で十分です」」

二人の少女が同時に動き、同時に魔砲を放った。二人の少女、同じ自分との戦いがこうして始まった。

ヴィヴィオ０１　二人の王とスターｖｓシュテル・ザ・デストラクター（後書き）

次回はトーマ編です。スターｖｓシュテル・ザ・デストラクターは
ヴィヴィオ編０２かソーガ編０２で行います。

トーマ０１　八神家の住人（前書き）

今回はトーマ編です。トーマ編でプロローグ的なものは終わりになります。

トーマ01　八神家の住人

それぞれの出会いを果たしている頃、八神家でははやてが車椅子に座りながらソファーに座るトーマとリリィの二人にお茶を出していた。

「ほんま、驚いたよ。まさかいきなり庭の上から落ちてくるなんて……」

「すみません。ご迷惑を……」

（ねぇ、トーマ。この人って……）

リリィがトーマに念話を送ると、トーマも送り返した。

（うん、八神司令だね。もしかしたら俺たち過去に来たんじゃ……）

（そうかもしれないね。何だかこの街、ちょっと次元のゆらぎがおかしい気がするし……）

二人がそんな事を話していると、はやてが不思議そうな顔をしていた。

「さっきから二人共じっとしとるけど、どうしたん？」

「あ、いえ、ちょっと考え事を……」

「あの、八神し……八神さん」

「別にさん付けせーへんでもええよ。それに八神さんじゃなくってはやてでええし、それで、どうしたん？」

リリィに微笑むはやて、リリィは少し申し訳なさそうにあることを聞いた。

「えっと、はやてちゃん……車椅子に座ってるけど、足怪我したの？」

（リリィ思い切ったこと聞くな……）

トーマがリリィの質問にそう思うと、はやては太ももを指すながら答えた。

「うんとな、二人共魔法については知っとるみたいやし、話してもええよね。実は私の足、ちょっとした魔道書の影響で生まれた時から歩けなかったんやけど、三ヶ月前に友達が協力してくれて、その影響が無くなったんや。あと少ししたら直ぐに歩けるようになるようになるから、心配せんでもええよ。」

「そうですか。何か色々と聞いてすみません」

「別にええよ」

はやてがやんわりと笑顔で言うのであった。するとはやては電話の方まで行き、電話をかけた。

「とりあえず、二人のことは管理局の知り合いに相談してみるわ。」

「何か色々とお世話になってすみません。」

はやてが知り合いに電話をしている中、トーマとリリィはのんびりと紅茶を飲んで過ごしていた。だが、

「あれ？突然切れてもうた。どうしたんやろ？何か爆発した音も聞こえたし……トーマさん、リリィさん。ちょっとうち、リンディさんの家に行ってくるわ。」

「あっ、それでしたら、俺らも」

「うん、爆発音とかも気になるし、」

こうして、トーマ、リリィ、はやての三人はハラオン家に向かうのであったが……

はやての案内でハラオン家があるマンションへとたどり着いた三人だが、そこでは小さな結界が張られていた。

「これって、」

「どこかの魔導師に襲われとるん？」

「ねぇ、トーマ。少しだけだけど、ソーガとイリスの魔力を感じるよ。」

「兄さんたちの？じゃあ、もしかして、兄さんたちが誰かに襲われてるって言うこと？」

「とりあえず行ってみようよ。」

「うん、」

トーマは何も無い空間から一冊の本と銀色の銃剣を取り出し、リリィの服もバリアジャケットに変わり、リリィはトーマにユニゾンをした。それを見てはやては……

「トーマさん、魔導師やったんや。それにリリィさんもリインフォ

ースと同じユニゾンデバイスやったん？」

「う～ん、ちょっと違うかな。」

『詳しく話すと長くなるから、後にしよ。今はあそこに』

「分かった。うちも行く。セットアップ！」

はやてもバリアジャケットに着替え、三人は結界の発生源である屋上へと向かうと、そこには……黒いコートを着た男とソーガが戦っている姿があったのだった。

トーマ０１　八神家の住人（後書き）

次回はソーガとヴィヴィオが合流し、戦いが始まります。

ＬＶＦ０２　運命をたどるために（前書き）

今回の話でなのはＧＯＤの序盤に入る感じになります。

ＬＶＦ０２　運命をたどるために

トーマたちが少し来る前、ソーガとイリス。そして先に来ていたヴィヴィオとアインハルトが合流した。

「ヴィヴィオ。お前たちも来てたのか」

「ソーガくん。ここは一体どういうことなの？というか、ソーガくん少し成長してるし」

「それにそちらにいる彼女のことを気になります。」

アインハルトがイリスのことを見つめて言うと、イリスは……

「私はイリス・ラインです。ソーガくんの幼なじみです」

イリスが自己紹介をすると、ヴィヴィオとアインハルトは……

「幼なじみって……」

「いつの間に見つけたんですか？」

「何か話が噛み合わないけど……」

四人がそんな事を話していると、フェイトが……

「あの、とりあえず皆さんのお話しあるみたいですけど……」

「あ、ごめん。フェイトさん。」

「いえ、本当はリンディ母さんかクロノと話をしてもらったほうがいいと思ったんだけど、二人とも出張に言ってるみたいだから……」

「まぁ、俺たちも帰りたいと思ってるけど、まずは状況を確認しないといけないし……ん？」

ソーガが言いかけた瞬間、何かの気配を感じ取った。

（魔力反応？それも……こっちに向かって攻撃仕掛けてくる！！）

「みんな！伏せろ！」

ソーガがそう叫んだ瞬間、突然ハラオン家のベランダが爆発した。

ソーガは咄嗟に白羊宮を展開させ、爆発を防いだ。

「いきなり攻撃してくるとか……誰だ！！」

ソーガが攻撃してきたほうに叫ぶと、そこには黒いコートを身に纏い、手には黒い刀を持った男がいた。

「ロストマジックの一つ、黄道十二宮発見。悪いがお前の持つ魔法狩らせてもらうぞ！」

「悪いけど、この魔法は俺の大切な魔法なんだよ。ギル！セットアップ」

ソーガはバリアジャケットを起動させ、襲撃者に向かっていった。

「ゼーガ！」

『黒鴉発動！』

男は刀を鞘に収め、ソーガが接近してきた瞬間、抜刀と同時にソーガは爆発した。

「ぐぅう」

「この程度か。」

男が刀を振りかざそうとした瞬間、ピンクのバインドが男を縛り上げた。男が振り向くとそこには

「ごめんなさい。でも、見ず知らずの子を襲うのは良くないと思う。」

バリアジャケットを着たなのは、フェイト、さらには大人モードのヴィヴィオとアインハルト、白い羽を生やしたイリスがいた。さらには……

「兄さん！」

「なのはちゃん。フェイトちゃん。」

トーマとユニゾン状態のはやても駆けつけてきた。

「トーマ、それにリリィも……それに幼い頃のはやてし……はやてさんも」

「あれ？何でうちのこと……」

「とりあえず、話は後にしたほうがいいと思う。兄さん、この黒い人は……」

「分からない。何か俺の十二宮魔法を狙ってきたみたいだけど……」

「さすがにこの数を一人で相手するのはキツイか。」

男がそう呟いた。なのはは男に近づくと……

「とりあえず、捕縛して話を聞かせてもらいます。」

「あら、悪いけど、そうはさせないわ。」

どこからとも無く声が聞こえた瞬間、白い光弾がなのはを吹き飛ばした。

「きゃあ！」

「なのは」

ユーノがなのはの体を受け止める、攻撃が来た方を見るとそこには白い着物を着た女性と鎌をもった男がいた。

「はじめまして、過去の人々。そして平行世界の住人さん。」

まだ幼さが残っている少女が丁寧にお辞儀をした。

「悪いですが、私達はまだ捕まるわけには行きません。それに手に入れなきゃいけない力もあることですので……」

少女はソーガを見つめて言うと、白い小瓶を取り出した。

「そこの十二宮使いさん。私に勝てると思わないほうがいいですよ。なんせ、私は……最強のロストマジックを所持してますので……」

少女が小瓶から白い液体を取り出すと液体は銀色の時計に変わった。イリスはその時計を見た瞬間驚いた。

「あれは、まさか……ロストマジック『時の波紋』どうしてあの人が……」

「あら、貴方……そう、まさかこんな所で会うなんてね……」

少女は少し悲しそうな表情をしたが、少女は直ぐに真剣な表情を浮かべた。

「次元魔法『タイムコード』あるべき運命をたどるために……離れ離れになってもらいます」

すると少女の上に黒い穴が開き、ヴィヴィオ、アインハルト、トーマ、リリィ、ソーガ、イリスの六人は黒い空間に吸い込まれた。

「そして、記憶も改変させてもらいます。貴方たちはまだ出会っていないことに……」

少女がなのはたちに白い魔力球を当て、姿を消した。

一方その頃、

紅い閃光と紫の閃光が何度目かのぶつかり合いをしていた。

「力を身につけたはずですが……まさか貴方もまた成長をしているのですね」

「えぇ、そうですね。」

スターとシュテルが互いの力について話していると、そこに水色の髪の少女がやってきた。

「おーい、シュテルんーーー！って、シュテルんが二人いるーーー」

「レヴィ。貴方も復活したようですね。」

「えっ、何？シュテルん、もしかして分身できるようになったの？」

「いえ、違います。こちらは別世界の私です。」

「こちらでは初めましてになりますね。私はスター。」

「別世界？よく分からないけど、僕はレヴィ！よろしくね。スター」

レヴィがスターと握手を交わしていると、シュテルが

「ところで、我らが王は？」

「そうそう、復活しそうな場所分かってきたから、迎えに行こう」

「分かりました。スター、貴女との決着は後です。私達にはやるべきことが……」

「そうですか。ですが、あなた方やるべき事、私も手伝わせてください。もしかすれば、元の世界に帰れる方法が王から教えてもらえるはずです。」

「分かりました。では、行きましょう」

スターはシュテルとレヴィと一緒に王が復活する場所へと向かうのであった。

ＬＶＦ０２　運命をたどるために（後書き）

次回はＧＯＤの話に入ります。アミタとユーノの戦いから始まります。

ソーガ０２　運命の守護者（前書き）

今回からＧＯＤの話に入ります。今回はソーガとアミタとの出会いをやります。

ソーガ０２　運命の守護者

謎の集団が襲撃してきてから数日が経ったある日のこと、なのはとユーノは化石発掘に来ていた。

（そろそろ切りもいいし、なのはに声をかけて休憩しようかな？それにしても、この間のアレは一体……）

ユーノは数日前に起きたハラオン家謎の爆発事件について思い出していた。

何があったかも分からず、何故かハラオン家のベランダが破壊され、さらには部屋の中が荒らされていたりした。さらには何故かみんなしてバリアジャケットを着て外に出ていたという奇妙な事件のことを……

（何故かその時の記憶がまったく思い出せない。まるで何かに記憶を消されたみたいだ……）

ユーノは一旦その時のことを思い出すのをやめ、なのはに連絡を入れようとした。すると……

「あの、そこの人。すみません。」

突然、後ろから声をかけられ、振り向くとそこには赤色の髪に何故か銃を向けている少女がいた。

「あ、あの、」

「あの、今困ってるんです。助けてください。治癒術使える方かＡＣ９３系の抗ウイルス薬が必要なんです！わりと緊急に、今すぐ！」

「わ、わかりましたけど、とりあえずその向けている銃を降ろしてください。」

「本当にお願いします。急がないと大変なことに……」

「僕のほうが大変なことになりそう……ん？この反応は……」

ユーノは上空から奇妙な反応を感じ、上を向くと空から一人の少年が落ちてきた。

「えっ、ちょっと、」

「お願いします。早く……って、」

落ちてきた少年は少女の方へと落ちていき、そのままぶつかってしまい。地上へと落ちていった。

「きゃあああああああ！」

少年と少女はそのまま森の方へと落ちて行くのであった。それを見たユーノは……

「一体何が……それにさっき落ちた男の人って……」

『ユーノ君？さっき妙な感じがしたんだけど、何かあったの？』

するとなのはから念話通信が来た。とりあえずユーノはなのはにさ

っきの状況を話すのであった。

そして森に落ちた少年と少女は……

「いたた、いったい何が……」

少女が起き上がり、辺りを見渡すとそこには青髪の少年が倒れていた。

「この子、さっき落ちてきた……もしかして私達がこっちに来たのが原因で……と、そんなことより早くキリエを……つぅ」

少女がその場から離れようとしたが、突然体がふらついた。

「キリエからもらった毒が……でもこんなもの、気合と根性で…

……」

「いや、無理しないほうがいいと思うぞ」

突然声をかけられた少女は辺りを見渡すと、さっき倒れていた少年が起き上がっていた。

「あ、ごめんなさい。大丈夫ですか」

「大丈夫だけど……というか、ここは……それにさっきの黒服のやつは……」

少年が何か呟いていた。すると少女は……

「あの、私、急ぐんで、事情説明はさっき会った子にお願いして……つぅ」

少女がその場から離れようとしたが、体が思うように動かず歩けなかった。

「何かさっき毒にやられたとか聞いたけど……大丈夫か？」

「だ、大丈夫。それよりも君、治癒術か抗体薬とか持ってない？」

「う～ん、どんな毒かよく分からないけど……多少楽になれるかもしれない魔法なら使えるけど……」

「へっ」

「星より来たれ！天蠍宮のスコル」

少年が呪文を唱え、少年の左拳に拳具が装着された。すると少年は少女の首に針を刺した。

「彼の者の体を蝕む毒よ。毒の猛威を止めよ！」

すると少女の体が白い光に包まれるとさっきまで動けずにいた少女が普通に立てるようになっていた。

「すごい。これって、解毒魔法？それともぜんぜん違う感じがする。それに古の力を感じるし……もしかして、十二宮魔法？」

「よく知ってるな。俺は十二宮魔法の使い手、ソーガ・ベルリッツ。お前は？」

「エルトリアのギアーズ。アミティエ・フローリアン！よろしくソーガ。って、こんな所で道草食ってる場合じゃない。ごめんね。わたし、妹を探してるから……じゃあ」

アミタは一瞬でその場から消えていった。残されたソーガはというと……

「一体何なんだ？あいつ……てか、ここ海鳴市じゃないし、ん？何で俺、さっきまで海鳴市にいたって思ってたんだ？何か記憶混乱してきた。えっと、確かトーマとリリィが行方不明になって……そんでもって、俺が探してる内に変な空間に飲み込まれて……気がついたらここにいたんだよな。ん？黒服の男って誰だ？あれ？」

『ねぇ、マスター？どうしたの？』

ソーガが考えまくっていると勝手に出てきた宝瓶宮のベルが話しかけてきた。

「あ、ベルか。何か記憶が混乱して……ベルは何かしらないか？」

『何かって、私もなんだか白い魔力球を喰らって記憶が少し消えてるんだけど……』

「魔力球？」

『うん、何かいきなり出てきて、私達を攻撃してきたんだけど……というか、イリスは？』

「イリスは……って、はぐれた？ユニゾンしてたのに？」

『ユニゾンしてたっけ？』

もう何がなんだか分からなくなってきたソーガ。すると……

「あの、すみませーん。そこの人ちょっといいですか？」

空から声が聞こえ、ソーガは上を見上げるとそこには白い魔導服を来た少女とローブ纏った少年がいた。

「あれって……」

「えっと、ちょっと聞きたいことがあるんですが、空から落ちてきたって聞いたんだけど、とりあえず名前聞いていいかな？」

「んと、ソーガ・ベルリッツ。何というか次元渡航者とかじゃない

んだけど、気がついたらここで気絶してたみたいなんだ。」

『あ、私は宝瓶宮のベルです。』

何故かベルも自己紹介をすると、白い魔導服を着た少女が、

「宝瓶宮？あ、名前いい忘れてました。私、高町なのはです。こっちは」

「ユーノ・スクライアです。えっと、ソーガさん。色々と聞きたいことがあるから一緒に来てもらっていいかな？」

「別にいいですけど……（それにしても、この二人って、なのはさんとユーノ司書長だよな。何でこんなに幼いんだ？まさかここって過去の世界って言うことじゃないよな）」

とりあえずソーガはなのはとユーノの二人に付いて行くのであった。

ソーガ０２　運命の守護者（後書き）

次回はキリエ登場と王の復活をやります。

ソーガ０３　王様復活（前書き）

今回はキリエの登場とディアーチェの復活です。そこにソーガはどう関わってくるかお楽しみに

ソーガ03　王様復活

なのはとユーノに保護されたソーガはというと、海鳴市の海岸沿いに一緒にいた。

「えっと、話をまとめると、君は未来から来たって言うことなのかい？」

ユーノがソーガから聞いた話をまとめて話した。するとソーガは……

「まぁ、そんな感じかな。あんまり信じられないと思うけど……」

「確かに未来から来たって言われて信じることできないけど……」

「どうしよっかユーノ君？クロノくんに相談したほうがいいよね。」

「でも、クロノは出張中だし……とりあえずソーガさんには暫くの間僕達と一緒に来てもらっていいかな？」

ユーノの提案にソーガは頷くとなのはがソーガにあることを聞いた。

「ねぇ、未来から来てって言うと、未来の私やユーノ君のことも知ってるんだよね。」

「まぁ、知ってるけど、あんまり教えちゃいけない気がするんだよ。こうして接触してる時点でマズイけど、未来での出来事を教えたら偉いことになりそうだし……特になのはさんの場合は……」

ソーガはなのはが近い未来大怪我することやヴィヴィオと出会うこ

とに関して言おうとしたが、それを止め、違うことを聞いた。

「あのさ、なのはさん。」

「ん？何？」

「上条当麻っていう人知ってる？」

「上条当麻？ごめんなさい。知らないけど……私と何か関わりあるの？」

「いや、ちょっと聞いてみただけだから……（上条さんを知らないというとやっぱりここは俺がいた世界の過去とはちょと違う世界って言うことなのかな？それじゃあ、フェイトさんの母親も……）」

ソーガは少し考え、とりあえず二人と一緒に歩き出そうとした瞬間、

『ソーガ、海の方から空間振動、さらには魔力収束を感知。なにか来ます！』

「空間振動！？それに魔力収束って……何が来るんだよ。」

ソーガはなのはとユーノの二人にそのことを伝えようとすると、二人もまたそれを感じ取っていた。

「ユーノくん！これって、」

「この魔力。まさかマテリアル達が……」

（マテリアルって、スターが人になる前になってたっていう闇の欠

片みたいなもんか？それに何かすごい胸騒ぎしてる。）

ソーガはギルダーツを起動させ、なのはとユーノの二人から離れた。

「ごめん。ちょっと気になることがあるから、行かせてもらいます。後で戻ってくるのでご心配なく！」

「ご心配なくって、海の方は危険だから……」

「ソーガくん。戻ってきて」

「ごめん。本当に！」

ソーガは全速力で反応を感じた場所へと向かうのであった。なのはとユーノもソーガの後を追うことに

……

ソーガは反応があった場所へとたどり着くと、そこ周辺が奇妙な魔力が渦巻いていた。

「何か本当に嫌な感じがしてきた。」

『この魔力、スターさまにそっくりですね。』

「あいつも元々マテリアルだからな。他の二人と似た感じがするのもしょうがないよ。っと、どうやら遅かったみたいだな。」

ソーガは反応があった場所を見ると、そこには幼いはやてとリインフォース。あとさっき会ったアミタと似た武装を持った少女がいた。そして、辺りを黒い光が包み込み、その光の中心には……

「ふふふ……ははは……ふっはははははははッ！！黒天に座す闇統べる王！復ッ！活ッ！！」

マテリアルDが自分の復活を凄く喜びながら登場していた。それを見たソーガは……

「あいつって、もっと王様の貫録なかったっけ？なんかバカキャラぽっく……」

ソーガはそうつぶやき、とりあえず近くに行くのであった。

「小鴉にポンコツ融合騎、それに桃色、それに後ろでこっちに近づいてきてる星使いか」

ソーガは気が付けれないように近づこうとしたが、あっさりバレてしまった。

「あら、いつの間に来たのかしら？」

桃色の髪の少女がソーガの事を見つめていると、ソーガは桃色の少女の所へ近づいた。

「アミタと似た武器使ってるみたいだけど、アミタの関係者？」

「お姉ちゃん知ってるんだ！あと、私に何か用？私、今、あそこの王様にちょっと交渉しようと思ってるんだから邪魔しないでくれない」

「何か嫌な感じがするし、はやてさんとリインフォースさん。とりあえずこの人は俺が抑えておくから、王様のことよろしく」

「え、あっ、はい」

「あの方、一体……それにマテリアルが言っていた星使いというのは……まさか……あの魔法の使い手……」

リインフォースがソーガが使う魔法について何かに気がつくのであった。一方ソーガはというと、

「とりあえず、色々と話聞かせてもらうから、俺がここに来た理由について、」

「あぁんもう、折角王様と出会えたのに……邪魔しないでよ。」

少女はソーガに銃を構えた。

「エルトリア・ギアーズ・キリエ・フローリアン。行かせてもらいます！」

「十二宮魔法・ソーガ・ベルリッツ。十二の星を使い、話を聞かせてもらう」

ソーガ０３　王様復活（後書き）

次回はソーガｖｓキリエとなります。次回で序盤の話は終わりになります。

ソーガ０４　二人の時の操者（前書き）

今回の話で本編のＳＥＱＵＥＮＣＥ１が終わります。という訳で、ソーガｖｓキリエから始まります。

ソーガ０４　二人の時の操者

謎の少女、キリエ。そして復活したマテリアルの王ディアーチェ。はやてとリインフォースの二人はディアーチェと対峙し、王の復活を感知したソーガはキリエと対峙していた。

「まったく、私は忙しいのよ。だから、ナンパはお断りよん」

「別にナンパしているつもりはないけど……アンタがあの王様を使って何するつもりか気になったからさ。もしも人に迷惑かかるようなら……止めさせてもらう！」

ソーガは双児宮ツインを召喚し、キリエに斬りかかった。

「おっと、面白い魔法だね。それってもしかして失われた魔法？」

「よく知ってるな！」

「博士の研究データからそういったものがあるって聞いてたからね。もしかしたら、エルトリアを救うために使えるかもしれないって思ったんだけど……その魔法もらっていい？」

キリエはソーガの攻撃を同じ双剣で受け止め、弾いた。

「それ、さっき銃だったよな！？」

「ヴァリアント・ザッパー。三つのモードに切り替えられるハカセが作ってくれた武器だよん。というわけで……」

キリエは瞬時に双剣から双銃にモードを切り替え、ソーガにゼロ距離で放った。

「ラピッドトリガー！！」

六発もの光弾がソーガに襲いかかるが、キリエは少し驚いていた。

「あれ？直撃したはずなんだけど……」

「悪いけど、白羊宮のウルを発動させてもらったぜ！」

ソーガの体に白い光が輝いていた。それを見たキリエは……

「防御魔法？でも、いつの間に……もしかして……」

「お前と戦う前に発動させてたんだよ。まぁ、本当は王様辺りの攻撃を防ごうと思ってたんだけど……」

「へぇ、すごいね。王様の使う魔法のこと知ってるんだ。もしかして王様が以前復活した時にいたのかな？」

「いいや、俺の場合はこの世界の未来じゃなくって、似た世界の未来で一度戦ったことがあるからな！」

「似た世界？もしかして、私とお姉ちゃんがこっちに来たことで平行世界に影響出ちゃったのかな？でもいっか！」

キリエは笑顔でそんな事を言った。それを聞いたソーガはため息を付いた。

「何かやりにくい相手だな。でも、お陰で時間稼ぎはできた！」

「へっ！？」

ソーガが笑みを浮かべた瞬間、はやて達がいる方からディアーチェの悲鳴が聞こえた。

「ぬおおおおお！」

「し、しまった！？もしかして、私のこと足止めしてたの！？」

「まともにやりあう理由はないからね。」

ソーガはそのままはやて達の方へと向かうのであった。キリエもその後を追う

「くぅぅ！なんて頑丈な奴なんだ！」

「主、大丈夫ですか？」

「平気や！王様、また悪いことしとるみたいやし、一回無力化させて話し聞かせてもらうで、」

はやてがそう言いながら、杖を振り上げた。キリエは王様を倒そうとするはやてを止めに入ろうとしたが、ソーガが前に立ちふさがった。

「悪いけど、お前にも話し聞かせてもらうからな」

「邪魔しないでよ！せっかく見つけたエルトリアを救う手立てを消させない！」

キリエが叫びながらソーガに向かって行こうとした瞬間、

「ちょっと待ったッッッ！！」

「きゃあ！」

突然水色の閃光がはやてに襲いかかった。はやてはギリギリでそれを避けると、王様がいた場所を見た。そこには……

「王様！大丈夫？この僕が来たからにはもう大丈夫だから！」

「お久しぶりです王」

「おぉ、シュテルにレヴィ……ん？なんじゃシュテル？上手く復活できているのか？新たに分身でも覚えたのか？」

ディアーチェがシュテルの隣にいるシュテルを少し大きくしたシュ

テルがいた。

「いいえ、彼女は私の分身ではなく、」

「シュテルんのお姉ちゃんだよ！」

「違います。この世界では初めましてになります。私はスターライト。この世界とは異なる世界からきたマテリアルです。とはいえ、元になりますが……」

「むっ、確かに我らと違ってぬしは人間っぽいぞ！まぁよい！とりあえずシュテルの姉ということにしてやる！」

「姉ではないのですが……」

スターが突っ込みを入れると、ソーガはスターの姿を見て驚いていた。

「スター、お前もこっちに来てたのか？」

「えぇ、とはいえ、どうやら貴方は今、私が知っているソーガではないみたいですね。未来のソーガですね」

「俺からしたら過去のスターになるのか。それで、何でお前は王様と一緒にいるんだ？」

「秘密です。」

スターが悲しそうな顔をしてそう言うと、ディアーチェが……

「ふっはははははは！マテリアルが揃い、さらにはシュテルの姉まで来た！小鴉！勝てるものなら勝ってみろ！」

ディアーチェが機嫌良さそうにいうと、さらにそこにもう一人の来訪者がやってきた。

「見つけた！キリエ！」

「げっ、お姉ちゃん」

そこにやってきたのはアミタだった。キリエはアミタが元気そうにしている姿を見て、驚いていた。

「どうして、毒はどうしたの？」

「あんなもの！気合と根性でどうにかしました！」

「いや、俺が治してやったんだからな」

「あれ？毒を治してくれた人。君のお陰でこうして……」

アミタが自分の体は調子がいいという感じに体を動かしていると、ソーガの隣に天蠍宮のスコルが出てきた。

『マスター、いい忘れてましたが……』

「何だ？スコル」

『彼女の毒は一応抑えていますが……解毒したわけではないので……』

「はぅ」

スコルがそう言った瞬間、アミタは倒れかけていた。

「「毒が消えてないから倒れた！！」」

ソーガとキリエが同時に突っ込みを入れるのであった。アミタは言うと……

「だ、大丈夫。こ、この程度！」

アミタは何とか立ち上がり、キリエを捕まえようとした。だが、

「残念だけど、この子にはどうやらやってもらうことがあるのよ」

突然アミタが誰かによって吹き飛ばされた。ソーガやはやて達が吹き飛ばした人物を見るとそこには着物を着た少女が扇子で仰ぎながら立っていた。

「こんばんわ。未来からの来訪者さん。そして、マテリアルさん達。と、一人は元だっけ。そして、また会ったわね。十二宮使いさん」

少女がソーガに向けて笑みを浮かべた瞬間、そこにいたソーガとはやては思い出したのだった。

「お前はあの時の……」

「そや、うちらに変なもの撃ち込んだ人や。それにそっちのお兄さんも会ったことある！」

はやてがソーガの事を思い出し、ソーガは少女のことを思い出した。
すると少女は……

「今回は私があなた達と会ったことは思い出させてあげたわ。だけど、他は思い出させてあげない！時がめちゃくちゃになっちゃうんだもん！」

「お前は……一体」

「前も自己紹介したでしょ、私はこの世界の未来から来た者。名はフーレよ。そして貴方と同じロストマジックを扱うもの……」

フーレは笑顔でいうが、その笑顔は決して友好的だとソーガは思うことはなかった。すると、マテリアル達は……

「えぇい！さっきから乱入して来おって！シュテル、レヴィ、スター、早い所砕け得ぬ闇を探すぞ」

「待ちなさい。王様。砕け得ぬ闇については私とこっちの桃色の子が何とかできるわ。」

フーレはそう言いながら、キリエの手を掴んだ。

「なんで、そんな事知ってるの？」

「私に知らないことはないのよ。ねぇ、キリエさん。」

「ま、まぁ、元々王様と協力しようと思ってたし、まぁいいか」

「ふぬ、砕け得ぬ闇を復活できるというのなら、一緒に来い！」

マテリアル達とキリエ、フーレはそのまま姿を消すのであった。アミタもそれを追うのであった。残されたソーガとはやて、リインフォースは……

「マテリアル復活に未来からの来訪者……こりゃ、闇の欠片事件より偉いことになるやな。リインフォース」

「えぇ、それより、そちらの少年は……」

「そや、えっと、ソーガさんやったっけ？うちらがどうやって知り合ったかは思いだへんけど、マテリアル達を追うの手伝ってくれませんか？」

「別にいいけど、一応ちょっとした犯罪者になりかけてるんだけど俺、それでもいいの？」

「今回の事件は未来から来た人も多そうやし、それにあのフーレっていう人はソーガさんのこと狙っておるみたいやし、あのシュテルのお姉ちゃんも関係者やし、ソーガさん的にはおとなしくすること出来へんやろ」

「まぁ、そうだね。とりあえず協力するよ。はやて」

「よろしくな。ソーガさん」

こうして、時と運命、そして交わった世界の物語は動き出すのであった。

ソーガ０４　二人の時の操者（後書き）

次回からはＳＥＱＵＥＮＣＥ２に入ります？多分ヴィヴィオたちを出すと思います。

ヴィヴィオ０２　時と次元を超えた出会い（前書き）

今回はヴィヴィオＳＩＤＥとなります。とはいえ、最初はソーガとなのはたちの会話となります。

ヴィヴィオ02　時と次元を超えた出会い

マテリアル達の復活で、なのは、フェイト、はやて、ユーノ、アルフ、リインフォース。そしてソーガの7人はどうするか話し合っていた。

「マテリアル復活に、異世界から来た人たち、それにソーガの世界から来たマテリアル」

「まったく、何でまたそんな面倒臭い状況になってるのかねぇ」

フェイトとアルフの二人がそう話していると、ソーガは

「俺やスターだって、好き好んでこっちに来たわけじゃないし、それに一応言っておくけど、今回の事件については俺がいた世界では起きてないからどういう結果で終わるとかまでは知らないから……」

ソーガがいた世界では学園都市でマテリアル達が現れたが、スターが闇統べる王からある力を抜き取り、あちら側のなのは達によってマテリアル達は倒された。そしてさらに、13年後にマテリアル達が再び復活するがソーガとアインハルト、二人が協力しマテリアルたちの力は今はスターが受け継いでいるのだった。

（そのこと話しておきたいけど、さすがにこの世界の未来とかに影響でそうだからな……）

ソーガはそう思っていると、はやてがあることを提案した。

「とりあえず、三手に分かれよ」

「じゃ、私とユーノ君は赤髪の人を」

「私とアルフは桃色の人を」

「私とリインはマテリアル達を……ソーガさんは？」

「俺か？そうだな……スターのやつに色々と聞きたいことあるからはやて達と一緒のほうがいいな」

こうして7人は三手に分かれて捜索をするのであったが……その前にソーガはある事を提案した。

「と、その前に、もしかしたら俺の知り合いに会うかもしれないから……」

ソーガはそう言いながら二つの魔方陣を展開させ、そこから二人の人物が現れた。

「マスター何か御用？」

「お呼びでしょうか？マスター」

魔方陣から出てきたのは宝瓶宮のベルと白羊宮のウルの二人であった。

「二人とも、悪いけど、暫くの間、なのは達と一緒に行動してもらっていいか？」

「私は別にいいよ～」

「マスターの命であれば……」

二人はソーガの命令を素直に受けるのであった。するとソーガの召喚魔法を見たなのは達は……

「すごい。それって召喚魔法？」

「それもいとも簡単に……」

「これってソーガさんが言ってた十二宮魔法？」

「そう、召喚してさらに、武器として形態を変えられる。ちなみにこいつらの呼び方は体じゃなくって人だからな。」

ソーガはそう言いながら、二人の十二宮を紹介していた。それを見ていたリインフォースは……

（まさか、あの扱いづらい魔法をいとも簡単に扱えるなんて……ベルカ戦乱時彼らを扱えたのは聖王のオリヴィエだけと聞いたはずだが……彼はどれほどの修練を積み、そしてどれほどの思いで扱えるようになったのか興味深い）

リインフォースはそう思いながらソーガを見つめるのであった。

そして一行は三手に分かれて行動するのであった。ソーガが召喚したベルとウルは……ベルはなのはたちの所へ、ウルはフェイト達と一緒にいくのであった。

そして時間が過ぎ、海鳴市の夜の空、そこに新たな来訪者が……

「あわわ、クリス。浮遊制御！私とアインハルトさんの落下防止」

「ティオもクリスの手伝いを……」

『にゃ！』

ヴィヴィオとアインハルトの二人は何とか下に落ちずに空へ何とか

飛んで落下を逃れていた。

「ここはどこでしょ、私達は一緒に練習していて」

「はい、突然おかしな空間にのみこまれて……確かスターさんも一緒にいたはずじゃ……」

「はい、それに何故か少しだけ記憶がなくなっているような……」

「アインハルトさんもですか？私もなんだか記憶が少しない感じがして……ソーガくんと会ったような気がしたんだけど……」

二人はとりあえずどこか降りれる場所を探そうと話している中、二人の姿を見つめる男がいた。

「たくっ、来訪者の監視って言われて来てみれば……あれって、ちょっと成長してるけど、ヴィヴィオじゃねぇか。もう一人は誰だか分からねぇが……さて、ちょっくらちょっかいでも出してみるかね」

男はそう言いながらデバイスを起動させた。そのデバイスは白い鎌。

「じゃあ、少し相手でもしてみますか！」

男はヴィヴィオたちに接近するのであった。

一方ヴィヴィオ達は……

「どうしたのクリス？」

クリスが突然何かを感知していた。するとアインハルトの愛機ティオも感知していた。

「どうやら誰かが接近してくるみたいです。ヴィヴィオさんはここは」

「はい！セイクリッドハート」

「アスティオン！」

「「セットアップ！！」」

二人は同時にセットアップをし、いわゆる大人モードへ姿を変え、そして接近してくる敵がやってきた。

「どうも、お嬢さん方！俺はエクス・ハルート！ちょっとおたくらにちょっかい出しに来たぜ！」

「この人、だれ？」

「管理局の人ではなさそうですね。ヴィヴィオさん、気をつけて……」

アインハルトがエクスに注意をすると、エクスは……

「なんだよお嬢ちゃん。いきなり警戒なんかしやがって……別にさっきのは冗談で……」

「普通ならそう思いたいですが……貴方の体の中から感じます。ソーガさんと同じロストマジックの力を……」

「へぇ、お嬢ちゃん。あの失われたロストマジックの使い手と知り合いか。まぁ、今はそんな事は関係ない。悪いけど、こっちもボスの命令だからな。少しだけ攻撃させてもらうぜ！」

エクスはハルクリッドを構えて言うのであった。

ヴィヴィオ０２　時と次元を超えた出会い（後書き）

次回はヴィヴィオ＆アインハルトｖｓエクスの戦いとなります

ヴィヴィオ０３　深淵を貪りし者（前書き）

今回はヴィヴィオ＆アインハルトｖｓエクスの戦いとなります。さらになのは達との最初の邂逅です。

ヴィヴィオ03　深淵を貪りし者

突然ヴィヴィオたちの前に現れたのはソーガと同じロストマジックの使い手であるエクスであった。

「それじゃあ、仕掛けさせてもらうぜ！エレトリカル・パニッシュ！」

白い魔力球が何十発も放たれ、ヴィヴィオとアインハルトに襲いかかってきた。

「ヴィヴィオさん。ここは私が……」

「はい！」

アインハルトは襲いかかる魔力球に対して、全て受け止め、それを相手に投げ返した

「旋衝破！」

「なっ、投げ返しやがった。」

アインハルトが投げ返した魔力球をエクスは障壁を張り、防ぐが、その隙を突いてヴィヴィオが……

「アクセルスマッシュ！！」

一気に接近し、エクスの顎に強力なアッパーを当てた。エクスは一瞬仰け反ったが、直ぐに体制を整えた。

「つぅ、なんて重い拳なんだよ。一瞬気を失いかけたぞ！」

「アクセルスマッシュが効いてない！」

「どうやら彼は打たれ強いのか。ロストマジックがそういう性質なのかもしれません！」

「おっと、お嬢さん。俺のロストマジックはそういう性質じゃないんでね。こっちは無茶な仕事をやってるおかげで防御面は鍛えられてるのさ。それにしても……魔法を投げ返すとか……しゃあない！ロストマジック深淵を貪りし者！」

エクスがロストマジックを発動させた瞬間、エクスの体に黒いオーラが包み込んだ。ヴィヴィオ達はどういう攻撃がくるか注意をした。だが、エクスは笑みを浮かべていた。

「悪いが、正面から堂々と撃ったりしないぜ！『影の呪縛』」

「きゃあ」

「ヴィヴィオさん！？くっ」

突然、ヴィヴィオ達は黒い触手のようなものに縛られた。

「とりあえず動きは封じさせてもらったぜ！ちなみにコイツは破ろうと思っても無駄だぜ！通常のバインド以上の硬さを持ってるからな」

（確かに、これでは破れない！どうすれば……）

アインハルトがどうすればいいのか悩んでいると、突然エクスに向かってピンク色の魔力球が襲いかかった。

「だぁ、この魔法は……」

エクスが魔力球がやってきた方を見ると、そこにはなのはがいた。

「大丈夫ですか？こちら管理局の高町なのはです。そちらの白い鎌を持ってる方、悪いですが拘束させてもらいます。」

「あちゃー、なのは隊長が来ちゃったか。だが、小さい頃みたいだし、こっちにも分が……」

エクスが魔法を放とうとした瞬間、緑色の魔力チェーンがエクスの体を縛った。

「って、おい！なんだこりゃ」

「動かなでください！これ以上戦闘を続けるのであればバインドの締め付けを強くします！」

ユーノがエクスに警告をするのであった。そしてヴィヴィオとアインハルトはなのはとユーノの姿を見て、驚いていた。

「あれって、」

「ヴィヴィオさんのお母様とユーノ司書長！」

「それも何か小さいですし、もしかしてここって過去？」

「ですが、何かおかしい気が……とりあえず、私達は逃げましょう！このままだと私達も事情を聞かれて未来から来たことを知られてしまいます」

「はい」

ヴィヴィオとアインハルトの二人は隙を突いて、その場から離れるのであった。

「おいおい、あっちのお嬢ちゃん達は逃げちまったぜ！追わなくていいのか？」

「あの人達に攻撃をしていた貴方を逃がすよりはマシです」

なのはは魔砲を溜めながらエクスに言うと、エクスはため息を付いた。

「やれやれ、面倒臭い相手だ！だが、」

突然エクスの体が黒く染まると、エクスの体が溶けるように姿を消した

「逃げられた？ユーノ君」

「チェーンバインドを破らずに逃げるなんて……一体彼は……」

「どうする？さっきの二人も追う？」

「その前に、ベルさん」

ユーノがベルの名前を呼ぶと、ベルがユーノの前に現れた

「呼んだ？」

「さっきの二人に見覚えは？」

「あるよ。あれはマスターの友達！あの子たちもこっちに来てたんだね！」

「そっか、ソーガさんが探してる人だといいね」

「うん、とりあえず僕はアミタさんを追おう！」

ヴィヴィオ０３　深淵を貪りし者（後書き）

次回はなのは＆ユーノｖｓシュテル＆スターとの戦いをやり、ＳＥＱＵＥＮＣＥ２は終わりです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4065y/

魔法少女リリカルなのはGODｏｒLVF

2011年12月28日21時57分発行